

「徐霞客遊記」訳注稿 西南遊記篇(其二)

「浙遊日記」(後半)

薄井俊二 埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード: 徐霞客、徐宏祖、遊記、浙江

はじめに

本稿は、明代の徐宏祖(一五八六―一六四一年)による「徐霞客遊記」の訳注である。

同書の巻二以降は、崇禎九年(一六三六)から同十三年(一六三九)にかけて、中国西南部をほぼ踏破した旅の記録であり、「西南遊記」とも称される。本稿ではその中から、第一巻「浙遊日記」の後半部分(崇禎九「一六三六」年十月九日の途中から、同十六日まで)を訳出する。

紙幅の関係で、口語訳と簡単な語注のみとする。詳細な注釈は、別途インターネット上で公開する予定である。

行程を記した地図は、前稿に掲載<sup>1)</sup>。

概要

九月九日、静聞とともに故郷の江陰を出発した徐霞客は、十月七日に浙江省金華府蘭溪に至る。翌八日には金華府城に泊まり、九日に北山(金華山)に登る(本稿はこの途中から)。先ず山中の鹿田寺を訪ね、そこに泊。十日に、浙江を訪ねた目的の一つであつ

た金華三洞を探索。蘭溪県に入って洞源寺に泊。十一日には蘭溪の洞窟を探索する。下山後、船に乗り、新安江を遡る。常山県(衢州地級市常山県)で再上陸し、輜で西に進んで、十六日に江西省に入る。

訳注

十月九日(承前)

この寺(鹿田寺)はその来歴は古いが、後に宦官達によつてだんだんと食い物にされてしまった。しかし金華府知事の張朝瑞(海州の人)が、殿宇を創建し、石の羊の群れを保全した。屠赤水の手になる「遊紀」があり、殿宇の中の石碑に刻まれている。

私がそこに到着したのは、已に午後であった。聞いてみると、鬪鶏巖がその東にあるとのことだった。そこですぐさま、静聞君と一緒に、二里東に進み山橋を渡る。山橋を東に下ると、二つの峯に挟まれているところに出た。小川がその中から流れ出ている。峯の石はすべて切れ切れになっていて、空へ飛び出し、小川に向かって走っているかのようであり、その形は鶏のトサカが怒りし

ているのに似ている。溪流がその下へと走り流れ落ちていて、これもまた一景勝である。

鬪鶏巖から東に数里下ると、赤松宮である。ここを下ると金華府城の東門へと連なる道である。思うに芙蓉峯の東の谷に位置するのだろうか。

鬪鶏巖の上に、趙という姓の樵夫が住んでいた。彼は北山の頂を指さして、「北山の頂に暮盤石がある。石の後ろに『西玉壺』があり、石から水がそこに注いでいる。日照りの時にその水を取って雨乞いをすれば、とても靈験がある」という。

時に日は已に傾いているが、静聞君とともに急いで草むらを掻き分けて登る。しばらく登ると、不意に呼びかける声が聞こえた。趙樵夫が、私たちが間違つて西寄りになっているのを見て、東を指さして深い草むらの中を誘導しているのであらう。

まっすぐに約二里ばかりで、やっと石の群れのあたりに着く。石の前に平らな台がある。後ろには岩が積み重なって聳えている。その中に一間ほどの小屋があり、仙人の塑像が彫られている。これがこの山の主である。塑像の後ろの石室の下に盆ほどの水たまりがある。おそらくこれが雨乞いの水であらう。そうしてその上の方には小川があつて、清らかに山頂から下っている。

時に太陽は沈もうとしていた。そこで（急いで）その流れを遡って再び進むと、門のように石が並んでいるところがあり、そこから水が注ぎ出でていた。門の上流にさらに浅く平坦な溝があつた。これこそが西玉壺であらう。

聞くところによると、「ここから東にさらに東玉壺があり、どち

らも山の頭から水を出して谷をなしていると。西玉壺からの水は、南に下るものは棋盤石を経て三洞に浸潤していき、北に下るものは裏水源を経て蘭溪の北に出る。東玉壺の水は、南に下るものは赤松宮を経て金華府城に出、東に下るものは義烏県に出、北に下るものは浦江県に出る。おおむねここが、金華府の分水嶺であるという。

玉壺は昔は盤泉とも呼ばれていた。その上に先が分かれて聳えているものを、今は三望尖と称している。飾つて言う場合は、金星峯とするが、総称すれば北山である。やっと峯の先端に至れば、ちょうど落日が深い川に沈むところであつた。峯の下を眺めやれば、一筋の水が残光を受けて光り、滔々と水を湛えて姿を一定にしていけないものが見える。思うに衢江が西から流れてきてひとたび曲がっているところが、そこなのであらう。

夕陽は已に沈み、次いで月が輝いてくる。天地の間の全ての音は消え去り、紺碧の世界は洗ったかのようなうた。まことにこの玉壺は人を骨髓から洗浄するものであり、私たち二人は、身体と影とが別物であることを覚るものであつた。思うに下界の世界はこせこせしていて、誰がこのような清らかな光りの輝きを理解しているのか。仮に高殿に登つて長く吟じたり、うま酒を用意して大江を眺めたりしたとしても、われわれがこうして万山の絶頂を踏み、道を窮め尽くしていつて、塵埃にまみれた世俗世界から遠く離れることが、天と地との間ほどもあることとは、比べものにならないのである。たとえ山の精霊や怪獣が、群れをなして近づいて来たとしても、恐るるに足りない。ましてや静寂の中、万物が動かない中で、天空・宇宙とともに遊ぶのであれば、その愉しみはま

たのないものである。

しばらく彷徨し、やがて二里下り、盤石に至る。

さらに草藪の中を二里下り、鬪鶏巖に至る。趙樵夫が私たちの声を聞きつけ、戸を開けて出てきた。そして「自分がこの山に住んでから、あなた方のような方はいませんでしたよ」と言う。

さらにまた西に一里上って山橋に至り、さらに西に二里で鹿田寺に至る。寺僧の瑞峯と従聞が、私たちが中々帰ってこないのので、二手に分かれて遠くから呼びかけてくれている。その声が、谷を震わせていた。

鹿田寺に入り、入浴して就寝する。

「注」張朝瑞：一五三六～一六一三。字は子禎、淮安海州の人。隆慶二年（一五六八）の進士。万曆十六年（一五八八）に山を切り開いて鹿田寺への道を整備し、寺を再建した。 屠赤水：屠隆（一五四二～一六一五）。字は緯真、あるいは長卿、浙江鄞の人。万曆五年（一五七七）の進士。家が貧しく、売文で生活をした。「明史」巻二八八本伝。 赤松宮：今の赤松山にある赤松道院。ここではその存在を示しただけで、実際には赴かなかつたのではないか。 衢江：衢州から東に流れ、蘭溪で北上する金華江と合流して富春江となる。

十日 鶏が時を告げるころ起きて朝食を摂る。空には已に曙光がさしている。鹿田寺の僧の瑞峯が私たちのために数本の松明を用意してくれて、寺僧の従聞に担がせて同行するよう手配してくれた。

朱荘の後ろから西に一里行き、北に山路を登る。道は甚だ険峻

であるが、一里ほどで、尖った岩が峯の頂で突出しているのがあった。その石の辺りから北山に沿って東に行けば、玉壺に到達できる（これは昨日の道）。（今日は）石の辺りから峯を越えて北に行く。そこが朝真洞である。

洞の入り口は高い峯の上であり、西に向かつて高く曲がっている。下は深い谷に臨み、その谷の中には住居がぐるっと取り巻いている。あの秦を避けた桃源郷の人々かと疑うが、どこからやって来たのかは分からない。これを問えば、双龍洞の外に住んでいる人達だという。

思うに、北山は玉壺から西に伸び、その中頃の支脈はここで一旦終わる。その後さらにまた一支脈を生み、西に進んで蘭溪まで走る。

後に生じた支脈が幾層かをなしており、第一の層が廻って龍洞塢となり、第二の層が廻って講堂塢となり、第三の層が廻って玲瓏巖塢となる。金華府の境域はここで終わりである。

玲瓏巖の西は、また廻って紐杭となるが、ここは蘭溪県の東の境である。その第二層が廻って白杭となり、第三の層が廻って水源洞となる。ここに至って、高い崖や深い谷といったダイナミックな地形も終わりとなる。

さてその後生じた支脈だが、層をなして中頃の支脈を取り巻いている。そこで中頃の支脈は西で止められて、どっと下へ崩れ落ちていくことになる。陥った第一層に朝真洞が口を開ける。その洞窟は高いところにあつて、洞底も乾いている。陥った第二層に冰壺洞が窪んでいる。この洞窟は縦に奥深く、滝がその中に懸

かっている。陥った第三層に双龍洞が穴を開いている。この洞窟は変化に富んで幻影的で、水が水平に流れている。これがいわゆる「金華三洞」である。

三洞ともいずれも口を西に向け、重なりあうように層をなしている。それぞれの距離は一里ばかりであるが、山の勢いが険峻なため、俯瞰して一度に目に収めることはできない。しかし洞を流れる水は、上の洞から下の洞へ、層をなして下っている。

中頃起きる支脈が尽きたところで、南へ下る支脈が生じていて白望山となる。その東の楊家山ともども、北山の前にび並んでいる。鹿田の門をなしている。

朝真洞の門口は広く開けており、その内は次第に下に下がっている。松明を手にして深く入っていくと、左側に脇部屋のような小さな穴がある。そのままにくねくねと進む。穴の行き止まりに水がしたり落ちているところがある。けれども岩の隙間の底部は乾いている。水がどこへ流れていつているのかは分からない。

脇室の穴を戻り、洞窟本体を底まで探求しようとする。そこは巨大な岩石が高低様々に聳えていて、上を振り上げば益々高くなり、下を見やればどんどん深くなっている。石の隙間を登ったり降ったりして、再び巨大な脇室に出た。すると忽然と、一筋の光が天から下つているところがあった。思うに、洞窟の天井はとても高い所にあり、そこに円い隙間が空いているのであろう。そこから下へ天光が差し込み、あたかも半月のようである。ほの暗い中でその光に出会うと、美しい真珠や宝石でできている灯火を見るようである。

内洞を出ると、左側にまた二つの洞がある。下の洞は、入ってみると少しで行き止まり。上の洞はくねくねしていたが、これも脇室程度である。右側に縦穴がある。覗いてみるが底が見えない。内洞の最深部なのだろうと思われる。

朝真洞を出て、ついで石が突出している峯頭から南に下る。

一里ほどで、西北に曲がり、また一里ほどで冰壺洞に出る。思うに朝真洞から下つてくる第二層の山である。

冰壺洞の洞口は、空に向かってくちばしを開いたようである。先ず洞に杖を投げ入れ、ついで松明を紐でつるして下るすが、水の流れる音を聞けばかりで底は見えない。そこで岩の隙間に手をかけ、虚空の中を通るようにして、洞の咽喉に入っていく。すると忽ち、轟々たる水音が聞こえた。そこで松明を手に取り、そろそろ進むと、洞の中央に、一筋の滝が空から落ちているところがあった。「氷の花が玉のかげらのような水しぶきが上がり、暗黒の中で銀白の輝きを見せている。」その滝の水は石の中に注いでいるが、その後どこへ流れていくのかは分からない。

再び松明を手にして、四方を探索した。洞窟として縦方向に深いことは朝真洞よりも勝っているが、屈曲ぶりは及ばない。

冰壺洞を出て、真つ直ぐ一里ばかり下ると、双龍洞である。洞は二つの門がある。「瑞峯が言う」「この洞は初めは門は一つであった。南に向かっている門は、万曆年間に、水の流れが崖の石を押し倒してきたものである」と。一門は南向きで、一門は西向きである。どちらも外洞である。中は大きく広々としていて、大きな建物が高く聳え、

四方に門を開いているかのようである。小さな部屋や脇室のような感じは全く無い。しかし内部には石の柱がぐねぐねと曲がり、鍾乳石が垂れ下がり、様々な不思議な景観をなしている。これが「双龍」の名の由来である。

内部にとても古い石碑が二つある。立っている方には「双龍洞」の三字が刻まれ、横たわっている方には「冰壺洞」の三字が刻まれている。どちらも燥筆によって飛白体で書かれているが、揮毫者の姓名を記さない。きつと、近代のものではないのであろう。

流水が洞の後ろから内門を通って西に出て、外洞を経由して流れる。うつむいて、水が出ているところをじっと見たところ、岩がその上を覆っていて、わずかに一尺五寸ほどの隙間しかない。まさしく洞庭山の左の裾野の丘と同じで、地面に這いつくばるようになっていないと、中に入れない。ただ洞庭山の場合は、地面が土であったが、ここ双龍洞では下が水であるのが異なっている。

瑞峯が私のために潘姥の家から浴盆を借りてくれた。「この姥は洞口に住んでいる。」姥が茶菓でもてなしてくれる。

そこで、衣を脱いで盆の中に置き、裸で水の中に伏して入り、盆を手で押して狭い口に入る。隘路を五六丈ばかり進むと、たちまちぐーんと広がっている。

一枚の平らな石板が洞の中に置かれている。地面から数尺離れており、大きさは数十丈、薄さは僅かに数寸しかない。その石板の左側からは鍾乳石が垂れ下がっている。その色はつややかで形は幻想的で、宝玉で作られた柱や旗竿のようで、洞の中に縦横に並んで立っている。その石板の下の方は、門を開き隙間を空けているように分かれていて、曲がりくねり、表面は冷たく輝いてい

る。流れを遡って更に進むと、洞がだんだん低くなって、とうとう進めなくなった。この洞の側面の石の辺りに水が流れ出している小さな穴がある。その大きさは指を入れられるくらいしかなく、水はその中から流れ出している。私は口でその水を受けてみたが、甘く冷たいことが得も言われぬものであった。おおよそ内洞の広さ深さは外洞よりも勝るものであった。

まとめると、朝真洞は「一つの隙間から天光が注ぐ」のが奇勝で、冰壺洞は滝がもたらす「無数の珠玉」が特異な光景、双龍洞は外洞には二つの門があつて、内洞には重なる帳が垂れ下がるという、水陸を兼ねていて、暗さと明るさの両方において不思議な光景を現出しているものである。

双龍洞を出ると、太陽が既に中天に昇っていた。潘姥が黄梁を炊いて食事の用意をしていてくれた。彼女の好意に感謝して頂いたが、御礼に杭州で購入した傘を一張り進呈した。

かくして鹿田寺の瑞峯・從聞の二人に別れを告げ、西に山嶺を一つ越える。その山嶺の西側には窪地がある。北から中へ入り、そのまま東へ曲がる。双龍洞から五里の地である。

さらに山を半里上ると講堂洞である。この洞にも二つの門があり、ひとつは西北に、もうひとつは西南に向かつている。広々として清浄であり、その高さは双龍洞に勝るが、幽冥さにおいては双龍洞には及ばない。そこに居住したり休んだりするのにふさわしい場所である。その昔、劉孝標が弘子を揮った所である。今は観音菩薩の塑像がその中にある。思うにここは、北山の後ろの支脈で南に下がるうちの第一嶺が、その南に向かつて金華三洞

をめぐり、また北に開いてこの講堂洞を形成しているのであろう。

山嶺の下の盆地の人々は石灰を作るのを生業としている。ここを流れる小川は涸れ果てていて一筋もなく、村人はわざわざ山に登って講堂洞まで水を汲みに行く。

(その涸れた)川底を渡り、ふたたび西に向かって第二の山嶺を越えると、北山の後ろの支脈が南に下る、第二の層である。嶺を下ると窪地がぐくつと迫ってくる。その窪地ではさらさらと水が流れる小川が北から流れ込んでいる。またその小川を涉って西に進み、再び山嶺に沿って北に上ると、石橋が口をあけたようなところがあつて、水が湧き出している。ここが北山後支脈の南下した第三の層である。外側は狭まつていて、内側は曲がりくねっている。ここは玲瓏巖と名づけられており、講堂洞から約六里である。

この山嶺に隣接する窪地には、民家がたくさん並んでおり、自然と一つの郷村世界を形成している。あの陶淵明が描いた桃源郷として、ここには及ばないだろう。ここから転じて西に進み、山嶺を一つ越えれば、蘭溪県との境界である。山嶺を(南に)下れば紐杭である。ここもまた民家が数十軒ある。さらにまた山嶺を(西に)一つ越えたところを思山祠と言つ。つまりそこが、北山後支南下の第四の層である。玲瓏巖からは西に六里くらいである。

この時、太陽が沈もうとしていた。洞源寺への路を尋ねると、ある人は「十里」と言い、またある人は「五里」という。「速やかに山嶺を下り、」小川に沿って南に五里進むと、暮れに白坑に至つた。ここも村人は多く、石灰作りを生業としていた。

さらにまた西に進み石塔嶺を越えると、そこが北山後支南下の

第五の層である。洞源寺はその山嶺の後ろの高い峯の北にある。

この山嶺から脇道の小道を通つて上れば僅かに一里ばかりであるが、正面から登る道は、一旦山を下りた麓の洞の傍らにある。そもそもこの地にも三洞がある。下にあるのが水源洞で、「一名は湧雪洞である。」上にあるのが上洞、「一名白雲洞である。」真ん中が紫雲洞である。このあたりは総称して「水源」という。だから同じ寺を「水源」と言つたり、「上洞」と言つたりする。そこで洞源寺と水源洞とは異なる場所にあるのである。

山嶺上の小道から寺に至ることができる、だから先ほど「五里」と言つたのだ。そして水源洞まで嶺を下り、そこから再び上ることとできる、だから別の人は「十数里」と言つたのだ。

時に真つ暗となり山道も分からなくなった。しかも道を尋ねられる地元の人も見あたらない。そこで大きめの道に沿つて山を下る。しばらくすると西へ分かれ、下る小道があつた。私は静聞を説得してその小道を進むことにした。しかししばらくしても寺に行き着かず、石灰を焼くかまどが眼前にいっぱい見えるばかりであつて、小道が複雑に入り組んでいる。ちよつどどうするしている内に、かすかな灯火が遙かに見えた。速やかにそこに走つたところ、粉挽き小屋であつた。その住人が言うには「この地は水源という所である。この窪地から北に行つて洪橋を渡り、右の尾根道に従つて三里上れば上洞寺である」と。深夜であり、行き着くのが難しいだろうと思つて、小屋に泊めてもらおうとした。ところがその人は「月が昼のように明るく、この山の小道には分かれ道もない。行くのに支障はありません」と言つ。そこで初めて、洞源寺は北山第五の層の北側にあることが分かつた。

そこで溪流を遡り、西北に進んで洪橋に至る。白坑からおよそ四里であった。橋を渡って北に向かい、尾根道を踏みしめて一里ほど上り、東に曲がって更に一里ほど進み、漸く洞源寺に行き着いた。無理を頼んで投宿する。

寺に「靈洞」について話す僧侶が宿泊していた。そこで趙相国に「六洞靈山」に関する刻石があるのを思い出した。それはこのことだろうか。しかしはっきりしないうちに寝てしまふ。

「注」從聞…もと靜聞。しかし彼は徐霽客共々訪問者である。瑞聞が「同行するよう」させたところからは、ここは寺僧の從聞の方がふさわしい。朝真洞…道教の真人がここで修行をしていたことからの命名という。とても高い…もと「千丈」。ここは、実数ではなく、とても高いことをいっているのである。宝石…宝石でできている灯火…もと「宝炬」。蠟燭の美称だが、ここでは訳のように解した。冰壺洞…縦穴で、狭い口から入ると、内部に小さな穴から注ぐ瀧がある。滝壺はなく、落下した水は四散して伏流する。今は、双龍洞とつながっている。双龍洞…洞口の両側に龍頭に似た鍾乳石があることからの命名。内外洞からなり、外洞は広々とした空間をなし、その奥に内洞への入り口がある。入り口はとても狭く、水が湛えられていることから、小舟に横たわってでないと入れない。燥筆…墨をあまりつけけない書き方。飛白…書法のひとつで、かすれ書き。洞庭…洞庭は湖南省北部の太湖。また太湖（浙江省）の別名。また太湖中にある山。この洞庭がどれを指すのかは不詳。

一応訳のごとく解した。劉孝標…劉峻（四六二—五二二）。山東の人、孝標は字。金華を隱棲の地と定めると、彼を慕って多くの人士が参集し、大きな天然洞を課堂として講学した。それが講堂洞である。洞源寺…宋太平興国八年（九八三）創建と伝える。上洞寺・棲真教院・棲真寺と

も称された。趙相国…趙志皋（一五二四—一六一）。字は汝邁、蘭溪の人。隆慶二年（一五六八）の進士。蘭溪の東南十五里の靈洞山に秘書楼・三山齋・六虚堂などを建て、賓客と景勝の地を詠じ、南京に赴任する際に、詩を刻して残したという。

十一日 黎明に起きると、（昨夜会話した）僧は既に出立していた。

私は寺の前殿を過ぎ、黄貞父の碑を読んだ。そこでいわゆる「六洞」とは、金華の「三洞」とこの山の「三洞」とをあわせて、「六」としたものだと思った。

前殿を出ると、趙相国の祠がちょうどその前に当たっている。高く聳える楼閣がある。趙相国の「靈洞山房集」や「六虚堂記」で称される「靈洞山房」とはこのことであろう。私は久しくここにあこがれていたのだが、今思いがけずそれに出会うことができた。自然（偶然？）がもたらす成果は、人があれこれと作為するよりも、遙かに靈妙な働きをするものではないか。そこで朝食を待たずに、靜聞とともに、寺の後ろから石畳を踏んで北に登り、先ず白雲洞を尋ねることにする。「洞は寺の北二里にある。」

一里で山嶺の頂に達する。そこを越えて北に進む。嶺はへこんでいて突然ぐるっとまわりながら下り、鉢型に窪みを作っている。草藪を掻き分けながら下ると、深い洞が一つあり、漆黒の闇へと落ち込んでいる。これこそあの白雲洞ではないかと思つたが、あまりに狭いために疑惑の念がぬぐえない。すると突然一人の樵夫が洞の上を通り過ぎた。仰ぎ見て彼に質問した。すると「白雲洞

はさらに北にあります。これは洞の窓です」と言つ。そこで再び上り、北に向かう。しかしその間、水は全くない。

二つの山に挟まれる間に、ぐるっと廻つて一大窪地を形成している。広さは百丈に近づき、深さも数十丈あり、螺旋状に下つていく。「もし水がそこに湛えられていれば、仙遊島の鯉湖と同じだ。」しかるにここは水が無い。私が見てきたところで、四方を頂に囲まれていて、しかもそこに水が注ぐ裂け目が無い窪地は、ここだけである。

また下り、左への分かれ道沿つて、西へ山の狭間へと転ずれば、そこが白雲洞である。

(白雲洞)は洞門が北を向き、門の頂部分に横様に裂けた石が懸かつていて梁のようになっていく。洞の中から仰ぎ見れば、ぐつと曲がつた様は、天台山寒巖山にあつた「鵲橋」が空に横たわつているのと同じ景色である。

洞に入り、左に曲がり、だんだんと下つていくとだんだん暗くなる。高く聳える門があり、内側はとも深い様子で、門の外には石の屏風と遙かに対峙している。(そこを通り過ぎて直進し、)暗黒の闇の中を杖で地面を探りながら数十歩行くと、洞窟内はだんだん広くなつていく。しかし灯火が無く、あたりを見渡しても何も見えない。そこで歩みを返して引き返す。途中まで引き返し、先ほどスルーした高く聳える門に入る。はじめは暗黒の闇しか見えなかったが、ここに至つて光線が安定すると、歴史として色々なものが見えてくる。そこで更に門と対峙していた石屏風の所を廻つて洞を出、山嶺を越えて寺に帰る。

朝食後、寺を出発し、元の道をたどつて西に下る。二里で洪橋

に至る。今度はこれを渡らず、橋の左側の民居の後ろを半里行き、紫雲洞に上る。

洞門は西に向いている。洞口は高いところにあり、上下とも平らで整っている。其の間に四五本の鍾乳石の垂れ下がった柱があり、門や窓を開いたようになっていて、洞の内と外とを二つの層に区切っている。「玉の窓や緑の旗竿のような石が洞内にはどこにでもある。洞は広くまた奥深く、岩石の表面も十分に美しい。」

洞の北の隅にまた奥深い洞がある。曲がりくねつて深いようだが、松明が無いのでやむなく引き返す。

洞から下つて(洪橋へ戻り、今度は)この橋を渡り、溪流沿いに東へ進む。山の石が半分程削られていて、掘削されたような絶壁をなしている。その麓は石灰焼きのための柴が積まれ、道を縦横にふさいでいる。ここが昨夜、道を探ることができなかった所であろう。石の梁を渡ると、水源洞はその傍らにある。

洞門は南向きで、ちょうど小川の上を跨ぐようである。洞口には鍾乳石が乱れ下がっているが、その中の一柱は、下から上にながっていて、手に持つて持ち上げたみたいである。「その上には透き通るような美しい鍾乳石がおびただしい数で下がっており、さらにまた一つの小さな洞が開いている。幻想的で塵気楼のような景観をなしている。」

洞の内部は上下二層に分かれている。下層は小川の水が流れ出てくる場所であるが、洞内では川は涸れていた。しかし洞を数歩でると、小川にあふれ出るばかりの水がある。思うに、洞内の水は、水碓によつて洞の側面に引き出されているのであろう。

洞の上層は洞門から石畳を踏んで上る。奥に入るに従つて次第

に下っていく。下りきると無限の広がり、の場所に来たような感じがした。とても遠くで滝の音が聞こえる。しかし明かりが無いので、奥を窮めることはできない。

洞を出て、洞口の「柱を持ち上げたようなところの内側に」座り、「古老のような奇幻な石の様を眺める。」この二日間を振り返るに、金華において四つの洞を、蘭溪においても同じく四つの洞を尋ねることができた。この地では六洞をもって、靈妙さを集めたものだとしてきたわけだが、私は八洞の景勝を極め尽くしたのである。ここで洞の優劣を評価せずにはおれない。

双龍洞が第一位、水源洞が第二位、講堂洞が第三位、紫霞洞が第四位、朝真洞が第五位、冰壺洞が第六位、白雲洞が第七位、洞窟が第八位、これが金華八洞についての順位である。これに新城県の山を加えるならば、洞山がある。ここは二つの洞口が並んで開き、左は明るく右は暗い。明るいは色鮮やかな霞を見ることができ、暗い方は水洞と陸洞とに分かれていた。洞の中には仙人の耕地に穀物が繁茂しているかのようで、畦が重なり波紋が平らに広がり、宝玉のような扉が次々と続き、狭い門が分かれ立って洞穴が曲がりくねる。この洞山の洞窟の余剰部分でもってしても、洞窟の魅力の不足を補完できるものがあるほどだ。この点によって金華八洞の中に位置づけられれば、双龍洞と水源洞の間に相当するものであり、他の第三位以下の洞の及ぶところではない。しばらくあれこれと品評をし、やがて静聞と一緒に洞窟から離れた。

昨夜来、道を探ねた水車小屋を通り過ぎ、西の山嶺に従って窪

地を出る。

西南に十五里行つて、蘭溪県の南門に達した。

宿屋に入る。顧僕はまだ食事の用意をしていなかった。せき立てて用意をさせ、急いで食べて乗船を探し求めた。この時、政府軍の援軍が北に向かっているところであり、船は借りあげられていて待機をしている状態であった。しかし援軍は中々到着しない。するとそこへ北からやってくる小舟があった。すぐさまそれに乗り込むと、布を運ぶ運搬船だった。船頭は出発するつもりはなかったようだが、そこへ船を徴発しに来た人がやってきた。そこで船頭は竿を刺して出発し、五里進んで、横山頭（横山村）で停泊した。

「注」黄貞父：黄汝亨（一五五八～一六二四）。貞父は字で、錢塘の人。万曆二十六年（一五九八）の進士。書法家としても高名であった。六洞：徐霞客はかく言うが、今では、蘭溪にある、涌雪・紫霞・白雲・呵・無底・漏斗の六つの洞だとされている。仙遊鯉湖：福建省仙遊県の九鯉湖。「徐霞客遊記」巻一に「遊九鯉湖日記」がある。鵲橋：天台山の寒巖山にある景勝のひとつ。「徐霞客遊記」巻一「遊天台山日記」に記述がある。水碓：水力を用いて穀物を碓づく道具。

十二日 黎明に出発する。

二十里行くと、衢江の南岸が青草坑である。「ここは湯溪県（金華市婺城区内）に属す。」その時既に太陽は中天に昇っていた。川の水が極端に少なくなり、船は重くて噴水が低く、中々進まなくなつた。

さらに十五里で裘家堰（蘭溪市裘家村）に至る。船頭が卸船を捜し、それと一緒に停泊する。この夜、小雨が降った。東の風がとも強い。

十三日 朝が明けると、空の雲も散開した。船頭は船室一室分の布を取り出して卸船に渡す。風がやがて次第に航行によいものになってきた。

（ここで出帆し（二十里で胡鎮（龍遊県湖鎮）に至る。

さらにまた二十里で龍遊県（衢州地級市龍遊県）に至る。日はわずかに午後に入ったくらいであった。別の卸船を待つことになり、ここで停泊する。

十四日 朝が明けると、この船に乗船していたものたちは、船足があまりに遅いので、みなして船賃を払い戻させ、陸に上がって行ってしまった。おかげで船の重量は軽くなり、また船内も広々となった。だから船足が遅いとは言っても不快ではないのである。早朝からの霧は既に晴れ、四周の山々が遠望される。ただし、風が次第に少しずつ逆風となってきて、帆を操るのに苦労して浅瀬に乗り上げないのが精一杯である。

四十五里進んで、安仁（衢州地級市衢州区安仁鎮）である。（ここが龍遊県と西安県の境界である。）

さらに十里進んで、楊村に泊まることになる。（ここは衢州からなお二十五里の地である。）

この日はトータルで五十五里進んだ。先に行っていた船に追いついて一緒に停泊する。そこで船足が遅れていたのはわれわれだ

けではなかったことが分かった。

川面は清らかで月は白く輝き、水と空とが一体となって一つの世界をなしている。もろもろの憂いや雑念が、さっぱりと洗い流されるのを感じた。我が身一身と村落の樹木や炊ぎの煙とが渾然と溶け合って、全体で大きな水晶の球となったかのようだ。その表面には僅かの隙間もなく、いささかの不純物もなく、眼前の全ての景物は軽やかに飛翔するかのようであった。

十五日 払曉に連続して二つの灘を遡る。政府軍の援軍は既に撤収しており、貨物を載せた船が湧くようにして下ってくる。しかし灘の口が狭く混み合って、上りも下りも焦ってひしめいている。先には船を得るのが難しかったのに、ここでは船が多すぎて困難に陥っている。旅行の困難さとはこのようなものだ。

（やっと抜け出し）十里行つて樟樹潭（衢州市衢江区樟潭鎮）を通過し、鷄鳴山に至る。風を受けやすいと軽やかに流れを遡っていく。

十五里で衢州府城に至る。正午になろうとしていた。

浮き橋をくぐり、さらに南に三里進み、西へ折れて常山溪口に入る。風が良好で帆を高く揚げる。

さらにまた二里で花椒山を通り過ぎる。兩岸には緑なす橘の木や赤い楓の葉が次々と現れ、ゆっくり眺めて楽しむ暇がないほどである。

さらにまた十里で、北に曲がる。

また五里進むと黄埠街（航埠）である。果実がなる橘の木が干本ほどもあって、どの家でも籠に果実をどっさり盛っている。橘の

実を売ろうという船が、川いっぱいに並んでいる。私はちょっと上陸して橋の実を買おうと思ったが、船頭は風向きがよいことを優先させ、再びさっさと帆を揚げて西に出発してしまった。

五里で日が没した。

(さらに)月明かりに乗じて十里進み、溝溪灘のほとりで停泊となった。(この西は常山県の境域となる。)

(「浙遊日記」了)

(二〇一二年十一月十二日提出)

(二〇一三年一月十一日受理)

十六日 朝日が鮮やかに明るい。東風が益々強くなる。朝起きると、焦堰を通り過ぎた。山は廻り川は曲がって、すでに常山の境内に入っている。西安県には山に橋が多く生えているが、常山県には山が多い。西安県の草木は明るくつややかで、常山県では山の樹木が黒っぽく色彩豊かでない。

流れを四十五里遡り、昼過ぎに常山県に至る。(このようにたくさん進めたのも)風のおかげである。

ここで上陸し、常山県の東門で担夫を捜し求めて傭う。

県城を一里ばかりで通り抜けて西門から出る。

十里進むと辛家舗である。山の小道は寂しげで、一軒の農家も無い。

さらに五里で寂れた数軒の小屋があった。太陽はもう西に沈んでいる。前途に泊まる場所がないのではと考え、そのままそこに泊めてもらつたことにする。(この地は十五里といふ。)

注

(1)『徐霞客遊記』訳注稿 西南遊記篇(其一)「浙遊日記」(前半)

『埼玉大学紀要(教育学部)』第六一卷第二号。

